

# 本を選ぶ

NO.411 2019年(令和1年)8月20日

●発行／ライブラリー・アド・サービス

<http://www.las2005.com>

本社 〒335-0004 埼玉県蕨市中央 5-20-1 TEL=048-432-3726

●<くろん・ぼわん>カランコロン

●司書の眼 第38回

●俳句とともにあることの楽しさ

●便利にはなったけれど…

●帰ってきた図書館員 (58)

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

## カランコロン

早朝、一本歯の高下駄で近所の公園を歩いている。高さ15cm程の、天狗が履いているような下駄である。体幹が鍛えられバランス感覚が向上すると聞き、勇んで購入したのだ。しかし昼間の人通りが多い時間帯に歩くのは、少し恥ずかしい。そこで夜遅くに歩いてみたのだが、まだちらほらと人は歩いていて、すれ違う人は皆ぎょっと驚いた顔をして足早に通り過ぎて行く。真つ暗闇のなか下駄を鳴らして歩いている人に出くわしたら、“牡丹燈籠”ではないが、やはり気味が悪いだろうと反省しきりであった。それからは早朝、犬の散歩やジョギングの人々に混じり、ひとり高下駄でグラグラ歩いているのである。効果はまだ、今ひとつわからない。

さてその『怪談牡丹燈籠』は、落語家・三遊亭圓朝作の長編人情噺である。初版はまだ録音技術のなかった明治17(1884)年。当時の最新メディア“速記”によって大人気の圓朝の創作落語を文字起こした、初の落語口演速記本だ。速記者二人が15日間毎夜寄席に通い、楽屋で高座を聴きながら速記したという。

その後、明治25(1892)年に東京・歌舞伎座で上演されると、舞台でもたちまち人気演目と

なった。振袖姿の美しい女の幽霊が、カランコロンと下駄の音を響かせて、夜毎、恋しい男のもとへと通う…というあらすじは、落語講談のみならず、歌舞伎や新劇、映画などでもすっかりおなじみとなったのだった。

夏と言えば怪談噺。今夏もまた上演された『怪談牡丹燈籠』を、東京日本橋の三越劇場で観劇した。かつて新劇の老舗劇団・文学座で、杉村春子と北村和夫の名コンビにより人気を博したが、今回はその北村の当たり役・伴蔵役を、息子で俳優の北村有起哉が初めて演じることも話題である。幽霊となったお露が通う萩原新三郎家の下働き・伴蔵おみね夫婦を軸にコミカルに描いており、テンポ良く楽しめる舞台となった。

最後は仇討本懐となる長い噺の中では、カランコロンと下駄の音…が有名だが、私は貧しいが仲睦まじく暮らしていた伴蔵おみね夫婦が、欲に目がくらみ運命を狂わせていく描写が人間臭くて好きだ。人間のどうしようもないところを生き生きと描いた作品だからこそ、現在までジャンルを超えて上演され、愛され続けているのだろう。

圓朝は噺家であると同時に、『牡丹燈籠』の他にも『真景累ヶ淵』や『文七元結』など、たくさん名作を生み出した希代の“作家”でもあった。現代の私たちは、圓朝の噺を聴くことはできなくとも、活字となった“作品”を読み味わい、様々な形で圓朝作品を楽しむことができるのである。

秋にはテレビドラマでも始まるようで、『牡丹燈籠』の楽しみ方は尽きない。(ささきえり)

# 司書の眼 第38回

— 髄鞘からお城まで —

鷹野 祐子

## 子どもの脳の話

先日、脳病理の先生が主催する、「脳の形成（ベビーが生まれるまで、立って走って小学校にはいるまで）」という所属機関の内部セミナーがあったので聴講した。脳科学にはまったく門外漢であるが、医学図書館に所属しているの、生の脳などは見慣れており、縦切り横切りの脳標本のスライドにもあまり抵抗がない。

脳神経のはじめは髄鞘がないのだそうだ。神経は、よく図で見るヒトデみたいな神経細胞に、長い軸索が伸びて他の神経細胞につながっている。髄鞘というのはこの軸索の周りについている、ワイヤー周りのビニールの絶縁体みたいなもので、軸索を通る刺激が速く正しく伝わるためにあるのだそうだ。

この髄鞘が青く染まる染色法（クリューバ・パレラ染色）で大人の脳と新生児の脳を染めてみると、大人の脳の大脳皮質（クルミの実の美味しいところ）が真っ青に染まり、新生児の脳はほとんど染まらない。新生児の脳の輪切りは大人に比べてヒダが少なく、つまりそれは、神経細胞が少ないということである。新生児にも脳神経はあるが、髄鞘がない状態のものが、刺激を繰り返し受けていくうちに髄鞘ができて、髄鞘と髄鞘をスキップできるようになり高速に正確に伝わるようになるのだそうだ。さらにその神経細胞の外側に次の神経細胞がつながって、そのまた先に神経細胞がつながって・・・と inside-out の法則で内側で生成されたものが外側につながり、脳の表面のヒダヒダが多くなっていく。こんなことが脳の成長の間に行われるというのを、きれいなアニメーションでわかりやすく解説してくださった。

子どもが小さいうちの脳の発達はすさまじい。有名なスキヤモンの発育曲線で見ると、神経関係は5歳くらいで大人の80%、12歳でほぼ100%成長している。2歳前後でも50%なので、「んまま」なんて言っていた時期から1年もたたないうちに、

2語3語話しはじめ、言葉の爆発期でペラペラしゃべり始める、というのもデータから理解できる。

## ザ・戦国時代城ツアー

先日知り合いに呼ばれて、逗子にいった。逗子というのは、東京の南で鎌倉の近くにある。鎌倉と言えば、小学校の高学年で習った鎌倉幕府。鎌倉幕府は源平の戦いで平氏を滅ぼした源頼朝が開いたから源系でしばらく政治をしていた、と思っていたのだが、実は、頼朝が亡くなってから北条氏が鎌倉に設立した幕府なので、北条系なのである。壇ノ浦と鎌倉って遠くない？と思ったのを思い出した。北条系と言えば、戦国時代では小田原城を本拠地として広く相模国を治め、山梨方面の武田系を抑える役目を持っていた。近所にある城址もみんな北条系だ。でも北条系ってあまり学校でなかった気がしないな、と思いながら横須賀線で逗子を目指した。

以前、小田原城に行ったとき、天守閣からの眺めで「石垣山一夜城はあのあたりです」という解説を聞いた。そのころは村上春樹の『騎士団長殺し』（新潮社／2017）を読み終わったばかりだったので、ここがその舞台かも、なんて思いながら向かいの山を見ていた。さらに博物館の解説を読んでいくと、一夜で城ができたわけではなく、戦国時代、豊臣秀吉が小田原征伐のときに目の前の山に小田原城から見えないようにこっそり築城して、出来上がってから木を切ることで一夜にできたように見せかけ、びっくりした北条氏が降参してきた、という。そのころ北条氏は民衆を大事にする政治をしていて、小田原の城下町は全体を土塁と空堀で取り囲んだ広大な外郭とし、武田氏や上杉謙信から守ったのに、突然現れた城にびっくりして古だぬきに降参してしまったのだ、と北条氏をちょっと情けなく思ったりした。

そんなきっかけから、むずむずと城に興味をもちはじめ、今年は、ザ・戦国時代城ツアーを家族

旅行として決行した。ちょうど運よく大河ドラマの「功名が辻」をamazonプライムビデオで連日見て、彦根城を作った井伊が出てくる「直虎」を見て、マンガ日本の歴史でざっとおさらいすると、どうやら、戦国時代のメインな出来事は大阪・京都・琵琶湖周辺・岐阜・愛知・静岡で起こっているらしいということがわかった。そこで、琵琶湖に3泊し城をめぐる、という大まかな計画とした。琵琶湖西を拠点にするので、まずは現存天守閣の彦根城に行く。そして、秀吉が初めて城をもった長浜城、信長の築城した安土城、やっぱり比叡山は外せないけど、愛知の犬山城にも行きたいから、関ヶ原も一応行っとく方がいいし、姉川の河原は浅井三姉妹につながるから見ておきたいし、伊吹山や竹生島も行くべきだしと考えていたら、とても3日では回れない。どれを削るか？お天気はどうだ？と直前までルートは決まらなかった。

### 岐阜城もよかった

でも、今回のメインターゲットである彦根城と犬山城のペーパークラフトを作りながらの、あーでもないこーでもないという計画は実にたのしかった。そして、新幹線の切符を買う少し前に比叡山高校出身の友達が、そこまでまわるなら「岐阜城」にも行くといいよと悪魔のようなささやきをした。岐阜？遠いでしょ？と思っていたら、行きは東京から新幹線で米原へいくが、帰りは犬山城のために在来線で名古屋まで行き犬山を目指す予定だった。分厚い時刻表をよく見てみると、新幹線のルートと在来線のルートは異なっていて、米原から名古屋までの途中で岐阜があることがわかった。まるで列車殺人の謎が解けたような喜び（地元の方には当たり前ですね）。岐阜城と言えば、信長の城、そして、功名が辻で山内一豊が千代を助け出し、叔父上から婚礼の許可をもらった稲葉山城なのである。ちょっと駅から遠いうえ、マムシの斎藤道三が築城した難攻不落の名城とうたわれた金華山山頂にあるので、登山かロープウェイでのぼる必要があるが、実際天守閣に登ってみる

と、ぐるりと長良川に囲まれて、岐阜市内を一望できる景色に感動した。

歴史の授業では、信長・秀吉・家康というのは3人ともおじさんで、ホトトギスの共通点しかないような暗記をしていたのだが、実は家康は松平家出身で一時は人質だったり、信長と家康は幼少期から知り合いだったり、信長は今なら自閉症スペクトラムとされるであろう評価を受けていて、「尾張の大うつけ」とよばれていたとか、調べれば調べるほど歴史は人間的でストーリーがあるのである。信長は本能寺の変のとき48歳で、今考えるとそんなにおじさんではない。

### Do The Hokey Pokey

家から2時間以上かけて逗子にいったのは、教育や子育てについてお話してくださいと依頼されたからだった。そこで、お話したのは、「分かる」ってどんなこと、ということ。

言葉というのは、理解のために使われる。でも、言葉を知っているだけでは、わかったことにならない。「鳩サブレ」という言葉から、豊島屋の黄色い袋を思い出すのは、その袋を見たことがある人だし、実際に食べたことがある人は、鳩の形と甘いサブレの味を思い出すかもしれない。そんなイメージがない人は鳩とサブレがわかっても全く分かったことにならない。言葉の本当の理解には、必ずそのイメージが見えることが必要なのである。英語でも I see. は「わかった」ということだ。暗記科目と思っていた日本史が、こういう体験、疑問の解明、楽しさと一緒になることで、覚えるだけではない楽しい教科に変身してしまった。できれば12歳のときに変身してほしいなあ。

どうしてこんなに学生時代に日本の歴史を知らなかったのか、と考えてみたら、実は私の高校は受験のために日本史の授業をおざなりにしており、必要時間数が足りなくて文科省からおしかりを受けていたことを思い出し、妙に納得したのだった。

(たかの ゆうこ：医学系研究所図書室)

# 俳句とともにあることの楽しさ

— 『俳句必携 1000句を楽しむ』 —

三沢 秀次

『俳句、流行ってますね!』と、本書の刊行後、多くの方に声をかけていただいた。テレビの番組では、俳優さん、タレントさん、芸人さんが季節のことばをおりませながら、五七五を詠んで宗匠が講評、そして語句を入れ替えたり、差し替えたり、添削したり……、するとご本人が思ってもみないような句に仕立てあがる。なおかつランキングまであって、番組はもりあがり、高視聴率、逃さずに見ている年上の知人もいます。

身近な事象、季節の風物、自分の思い・感じたこと、などなどが次々と一句となり、褒められた出演者だけでなく、見ている方も何だか幸せな感じを受け、私もできるかもと、ちょっと届く感じがするから不思議です。それは誤解を恐れずに書いてしまえば、四季のある国に暮らし、歴史と地域と思想に根ざした共通の言語があり、そして紙と鉛筆さえあれば自分なりの句が詠めそうという、日々の生活のなかに俳句という文芸は位置を占めているからだと思うのです。

身近な文芸なのですが、「日々」や「身近」には楽しいこと、きれいなこと、きもちのよいことばかりではありません。生老病死は自分だけでなく、家族、友人、先輩後輩、地縁血縁にも及びます。今年ハセミの鳴き声を聞くのが遅かったですし、紅葉を迎える前に葉が枯れてしまうかも知れない異常気象が常態になっています。先の戦争から70年以上が過ぎても心身の傷・痛みは癒えません。3.11の東日本大震災はこころとからだと大地をいまだに生々しくえぐっています。そうした「日々」や「身近」のなかで、五七五音字の俳句は江戸時代以降、連続と詠み継がれ、日々あらたに生まれています。

本書『俳句必携 1000句を楽しむ』の編著者は、俳人・俳文学研究者の宮坂静生さん。1937(昭和12)年、長野県松本に生まれ、14歳から作句をはじめました。2009年5月1日から週に3回、「日本

農業新聞」でコラム「おはよう名歌と名句」の俳句欄を連載してきました。本書は10年間の1500余句から1068句とその鑑賞文を掲載した俳句鑑賞のアンソロジーになります。

構成は新聞掲載日の1月1日から12月31日の1年におおよそ並べ、新年、冬、春、夏、秋、冬と季節をたどっています。鑑賞句は、掲載時期や時候にあわせた句、なじみの深い古典秀句、俳句界での意欲作・注目作、地貌季語(ちぼうきご)の俳句など多様で多彩です。本文引用句(同じ作者の句や同じ季語の句など)を含めると1350句ほどを紹介しています。俳句作者は、江戸期の宗鑑、芭蕉、蕪村、一茶から、子規以降の近代・現代の作者まで660余名の方々にのびります。

鑑賞文は200字ほどで、句の解説あり、時候のトピックあり、作句・作者の背景ありで、コンパクトにして、平明に語られ、ことば・時候・地域の要をつかみ、編著者ならではの俳句へのまなざしが注がれていると思います。季節の行事、暮らしの変遷、忘れてはならない歴史の変動、懐かしい慣習、地域の文化や生活、普段の生活からいつの間にか抜け落ちたことばや習わし、平和・反戦への思い、文学史・俳句の歴史などが、凝縮された鑑賞文となっているかと思えます。

編著者は月刊俳句誌『岳(たけ)』の主宰です。この30年ほどは、〈桜隠し〉〈木の根開く〉など地域に根差した季節のことば「地貌季語」を精力的に発掘・収集・紹介してきました。その一端は、本書後半の「地貌季語の息づく国」「おもな地貌季語」で紹介しています。また、「俳句鑑賞」「作句案内」「書籍案内」なども添えました。日々俳句に親しみ、俳句を詠んでいる方々ばかりでなく、ことばや季節、自然、日々の暮らしに目を向ける際に、俳句とともにあることの楽しさや豊かさを、広く、多くの方々にお伝えできればと思います。

(みさわ しゅうじ:平凡社)



『俳句必携 1000句を楽しむ』／宮坂静生編著／四六版上製本 400頁 定価:本体 2800円(税別)／平凡社 2019年5月刊

## 便利にはなったけれど…

溝上 牧子

今の日本？ いや多くの先進国で巨大通販サイト Amazon を知らない人は殆んどいないのではないだろうか？では、そこで買物をしたことがないという人は？アマゾン川は大西洋に注ぐ世界最大の河川だ。そのことを考えてみても、おそらくアマゾンの創業者は「世界最大の流れ」を自身の目標にかかげネット通販サイトを作ったのだらうと想像する。実際その通りになりつつあるのだが。アマゾンにかぎらずネットでのやり取りが当たり前になった昨今、ボタン一つで必要なものが届くという通販の便利さは皆が認めるところ。私とて通販に限らず、ネットにどれだけ支えられていることか。会社でだって、人への伝言、連絡、申し込み等々。電話だけでなく瞬時にメッセージを送ることのできるメールも多用する。航空券を買い、出張の宿を予約し、チラシを作り、本の原稿の印刷所への入稿すら会社にいながら出来る時代になった。

自分が会社に勤め始めた1990年頃には、こんな時代が来るとは思っていなかった。パソコンはあるにはあったが会社に数台。黒い画面に白もしくは黄色とか眩しいような緑の文字データが浮かんでいる社内構築の作業用。決まった数限られた相手にだけデータを送信できるパソコンだった。書類作成はワープロ。ファックスなどは、送っているはずなのにその先から自分の送った紙がまた出てきてしまうのを見て、不思議そうに首を傾げるおじさんのいた時代だ。今の会社に入ってから、当初は出版専用のパソコンはなし。ある日パソコンが入ったが3人の共用物、声を掛け合って使った。更にそれから数年後、まさかの一人一台時代に突入。パソコンなしでは仕事が進まない時代になってしまった。

話を戻すが、アマゾンは欲しい本を注文すれば在庫があればほとんど次の日には届けられる。本が少しずつ売れなくなり、一時期、多くの書店が多種多様だった売りに売れ筋以外はほとんど置かなくしてしまい、本が好きな人は棚から目当てのものを探さず書店から書店へ彷徨う人も増えた。そこにアマゾンの出現。なんでも揃う便利

なサイトにみんな喜んだ。そしてこぞって本を注文するようになったのではないだろうか。私もその一人だ。その当時のサイト運営はアマゾンが主体となり本を在庫してくれていた。しかし時は流れ、現在、いろんな問題が出てきているように思う。巨大化して全てのを飲み込む勢いだ。その流れに入ったが最後、大きな渦に巻き込まれ戻れなくなってしまうのではないかと危惧する。ある時からアマゾンはバックオーダーをしなくなった。以前から直取引への流れはあったが全面的な出版社直取引への加速はこの時期と一致するように思う。取次経由を選択した我が社はアマゾンでなかなか思うように在庫してもらえないモヤモヤをずっと抱えてる。

そんな折、最近になって『スリップの技法』（久禮亮太著／苦楽堂／2017）を読んだ。読んでみると…なんだか書店に頭が下がる思いがした。同時に書店で働く人のことを一部しかわかっていなかったことに気付いた。形は違えど、書店員さん達が、毎日、本を注文し、来た本を並べ、返品する本を荷造りし、レジに立ち、フェアや並べ方の工夫をしている。注文にも、並べるときにも、返品にもこんなに頭を使って働いていたのか…なんと目まぐるしい日々。この本を書いた彼が日々働く姿が、よどみない動きとともに目の前に浮ぶ。こんなふうに書店の人がいろんな本を繋げて考えてくれているから本が売れるのだなあと心が熱くなる。POSデータだけではわからないものを、彼はスリップを通じて記録し、想像し、それを売り場に反映させていると書いてあった。どんな人がどの棚から、どんなふうに本を買ったのか知る事は売り方のヒントに繋がると考えている。スリップの切れ端に、情報や思いついたメモ。そんな利用方法があったのか！ 目から鱗だった。

便利に縛られ過ぎないように…全部あるのがいいわけじゃない。全てがあるわけではないけど「何かある」というのが本屋っぽいなあ、しみじみと考える読書となった。（みぞかみ まきこ：朔北社）



# 帰ってきた図書館員 (58)

—教科書図書館から意外な展開—

山下 青葉

先日久しぶりに旅行をすることになり、道中の列車の中で読む文庫本を買いに書店へ行った。読む本は仕事柄図書館で借りることがほとんどなのだが、本を買うことも嫌いではないので、このような機会があると購入したりするのだ(ちなみに買った本は読み終えた後はほぼ図書館に寄贈している)。

新刊の文庫のコーナーを眺めていたところ、『実話芸人』(コアラゲンはいごうまん著/幻冬舎/2019)という本が目に入った。面白そうだなと思ったのと、ボリュームが今回の旅行で読むのにちょうどよさそうだったため、購入した。

この本は2016年に発行された『コレ、嘘みたいやけど、全部ホンマの話やねん』を改題したもので、ワハハ本舗に所属する芸人である著者が、全国津々浦々の噂のスポット(その場所自体に何かある所や興味深い人がいる所など)に赴き、身体を張っているいろいろ体験したことをレポートしたものだ。

全部で30の記録が収められていて、東日本大震災の被災地(宮城県石巻市)でのボランティアや刑務所の慰問などの真面目なものから、アイスのガリガリ君のアタリを捏造したり、会ったこともない人の葬儀に参列するなどというようなものまでなかなかバラエティに富んだ内容なのだが、その中で「これは…」と思ったのが、「調べて驚いた、教科書の深〜い話」というもの。

## ふとした疑問から専門図書館へ

著者がふとしたことから、教科書の算数の文章題に出てくる子どもの名前が一番多いのはなんだろうという疑問を抱き、東京都の江東区東陽町にある「公益財団法人教科書研究センター附属教科書図書館」に調べに行く。

小学校の算数の教科書を出版している会社は6社あり、それぞれに上下巻2冊ずつ発行しているため、1学年で12冊読まなければならないので範囲を6年生の教科書にしぼり、3日間かけて平成10年から20年までもので調べたところ、第1位は「アキ

ラ君」だったとのこと。

これで終わればよいものを、著者は教科書に載せる子ども達の名前をどのように決めているのかということに興味に移り、出版社に連絡を取る。担当者はきちんと対応してくれたが、結論としては「別段深い意味はない」ということ。しかし著者は、その出版社の教科書に「ケンジ君」という名前が頻繁に登場するため、何かあるのではと疑って追及したところ、編集長の子息の名前だったということが判明したというのだ。

## 戦後の算数の文章題

ここまでだったら、ちょっと笑える小ネタということで終わっていた話なのだが、著者は教科書図書館に昭和25年の教科書があったことから戦後間もない頃の算数の教科書の文章題がどうなっていたかに興味を持ち、調べを進めていく。

すると、現在2行から5行くらいの簡潔な文章で作られている問題が、昭和25年当時は妙にストーリー性を帯びており、たとえば学会会での劇の上演時間が何分だったかという文章題が、クラスで劇の配役を決めるところから始まり、クラス全員が力を合わせて練習を重ねて学会会当日を迎え、劇は表舞台に立つ者だけではなく、裏方にまわる者の力もあってできるのだという主人公の感慨まで描かれていて、1問目を出題するのに4ページも費やしていたのだった。

ゆとりがあったといえればそれまでなのだが、著者はその長い文章題に今の教科書の登場人物にはない行動原理を感じ、感動している。

また当時はまだ衛生状態が悪く、伝染病で亡くなる子ども達も多かったためか、文章題にそのことが反映されているのだが、それも「伝染病から身を守るためにどの程度怖いかを知らなければならないがどうしたらよいか」という先生の問いから始まり、生徒が「病気ごとの生存率を調べるとよいと思う」と答えて割合と比率の問題が始まる

という具合なのだ。

### さらには出版社にも

これらの文章題は東京書籍で出版された教科書に載っていたため、著者はどうしてこんなに長く情緒的な問題になっているのかどうしても知りたくなくなり、東京書籍を訪ねていく。

こちらでも担当者がきちんと対応されたようで、昭和25年当時、学習指導要領が、道徳心を学ばせるため、算数以外でもいろいろな要素をそれぞれの教科書に織り込んでいたという話が語られる。

当時日本はGHQの統治下にあり、現在の「道徳」に当たる戦前の「修身」の授業が危険思想の温床となったとの考えから昭和20年に廃止されていたので、時の政府は日本人として大切な道徳を教えるために、各教科の教科書に道徳的な教えを紛れ込ませることを考えたというわけなのだ。

それでは、「修身」が教科としてあった頃は、算数の文章題はどうだったのか？

ここまできると、東京書籍の担当者もすっかり乗り気という状態になってしまっていて、早速調べたところ、見事に現在と変わらない味気ない文章だったのだった！（文中に兵隊が登場してくるところが時代を感じさせるというのはあったが）。

結局、昭和33年に「道徳」の授業が行われるよ

うになるまでの13年間、算数の文章題は道徳を感じさせる長く情緒的なものだったというわけなのだ。

### 巡りめぐって

担当者にも勉強になったと感謝されたところでやめておけばよいものを、ここでまた著者の芸人根性が頭をもたげ、教科書に登場する子どもの名前に自分の本名「よしひろ」を使ってもらえないかという話になるのだ。

そして何とこの話は成立してしまい、問題中自転車を友人にぶつけるという「人身事故」を起こしているものの、よしひろ君は小学4年と5年、中学2年と3年の教科書に登場することになり、担当者からは自分が編集から離れない限り、よしひろ君は登場し続けるとのお墨付きをいただいて「東京書籍、バンザイ！」という台詞でレポートは締めくくられている。

この『本を選ぶ』で、専門的な図書館を訪ねる企画が不定期に連載されているが、このレポートはこれに掲載してもいいと思ったくらい、面白いと思った。コラアゲンはいごうまん氏はいわゆる図書館ユーザーではないと見受けられたが、だからこそその型破りな興味の方向性がとても好ましく思われたのだった。（やました あおば：図書館員）